

# クリスマスのご贈物

竹久夢二

青空文庫



「ねえ、かあさん」

みつちゃんはお三時やつのとき、二つ目の木の葉パンを半分ほお頬ばりながら、母様にいいました。

「ねえ、かあさん」

「なあに、みつちゃん」

「あのね、かあさん。もうじきに、クリスマスでしょ」

「ええ、もうじきね」

「どれだけ？」

「みつちゃんの年ほど、おねんねしたら」

「みつちゃんの年ほど？」

「そうですよ」

「じゃあ、かあさん、一つ二つ三つ……」とみつちゃんは、自分の年の数ほど、テーブルの上に手をあげて、指を折りながら、勘定をはじめました。

「ひとつ、ふたあつ、みつつ、せいから、ね、かあさん。いつつ、ね、むつつ。ほら、む

「つつねたらなの？　ね、かあさん」

「そうですよ。むつつねたら、クリスマスなのよ」

「ねえ、かあさん」

「まあ、みつちゃん、お茶がこぼれますよ」

「ねえ、かあさん」

「あいよ」

「クリスマスにはねえ。ええと、あたいなにがほしいだろう」

「まあ、みつちゃんは、クリスマスのご贈物のことを考えていたの」

「ねえ、かあさん、何でしょう」

「みつちゃんのことだもの。みつちゃんが、ほしいとおもうものなら、何でも下さるでしょうよ。サンタクロスのお爺じいさんは」

「そう？　かあさん」

「ほら、お口からお茶がこぼれますよ。さ、ハンカチでおふきなさい。ええええ、なんでも下さるよ。みつちゃん、何がほしいの」

「あたね。金の服をきたフランスの女王様とね、そいから赤い頬ほっぺをした白いジョーカ

ーと、せいから、お伽とぎばなしの御本と、せいから、なんだつけせいから、ピアノ、せいから、キュピー、せいから……」

「まあ、ずいぶんたくさんなのね」

「ええ、かあさん、もつとたくさんでもいい？」

「えエ、えエ、よござんすとも。だけどかあさんはそんなにたくさんとてもおぼえきれませんよ」

「でも、かあさん、サンタクロスのお爺さんが持つてきて下さるのでしよう」

「そりゃあ、そうだけれどもさ、サンタクロスのお爺さんも、そんなにたくさんじゃ、お忘れなさるわ」

「じゃ、かあさん、書いて頂ちやうだい戴だいな。そして、サンタクロスのお爺さんに手紙だして、ね」

「はい、はい、さあ書きますよ、みつちゃん、いつてちやうだい」

「ピアノよ、キュピーよ、クレヨンね、スケッチ帖ちゆうね、きりぬきに、手袋に、リボンに……ねえかあさん、お家うちなんかくださらないの」

「そうね、お家うちなんかおもいからねえ。サンタクロスのお爺じいさんは、お年寄りだから、と

でも持てないでしょうよ」

「では、ピアノも駄目かしら」

「そうね。そんなおもしろいものは駄目でしょ」

「じゃピアノもお家もよすわ、ああ、ハーモニカ！ ハーモニカならかるいわね。それからサーベルにピストルに……」

「ピストルなんかいるの、みつちゃん」

「だって、おとなりの二郎さんが、悪漢わるものになるとき、いるんだっていったんですもの」

「まあ悪漢ですって。あのね、みつちゃん、悪漢なんかになるのはよくないのよ。それにね、もし二郎さんが悪漢になるのに、どうしてもピストルがいるのだったら、きっとサンタクロスのお爺さんが二郎さんにももってきて下さるわ」

「二郎さんそこへも、サンタクロスのお爺さんくるの」

「二郎さんのお家へも来ますよ」

「でも二郎さんここに、煙突がないのよ」

「煙突がないとこは、天窓からはいれるでしょう」

「そうお、じゃ、ピストルはよすわ」

「さ、もう、お茶もいいでしょ。お庭へいって遊びなさい」  
みっちゃんはずぐにお庭へいって、二郎さん呼びました。

「二郎さん、サンタクロスのお爺さんにお手紙かいて？」

「ぼく知らないや」

「あら、お手紙出さないの。あたしかあさんがね、お手紙だしたわよ。ハーモニカだの、お人形だの、リボンだの、ナイフだの、人形だの、持ってきて下さいって出したわ」

「お爺さんが、持ってきてくれるの？」

「あら、二郎さん知らないの」

「どこのお爺さん？」

「サンタクロスのお爺さんだわ」

「サンタクロスのお爺さんて、どこのお爺さん？」

「天からくるんだわ。クリスマスの晩にくるのよ」

「ぼくんとこは来ないや」

「あら、どうして？　じゃきつと煙突がないからだわ。でも、かあさんいったわ、煙突のないとこは天窓からくるって」

「ほう、じゃくるかなあ、何もつてくる?」

「なんでもよ」

「ピストルでも?」

「ピストルでもサーベルでも」

「じゃ、ぼく手紙をかこうや」

二郎<sup>じろう</sup>さんは、大急ぎで家<sup>うち</sup>へ飛んで帰りました。二郎さんの綿入をぬっていらした母さんにいいました。

「サンタクロスに手紙をかいてよ、かあさん」

「なんですつて、この子は」

「ピストルと、靴と、洋服と、ほしいや」

「まあ、何を言っているの」

「みっちゃんとかあさんも手紙をかいて、サンタクロスにやったつて、人形だの、リボンだの、ハーモニカだの、ねえかあさん、ぼく、ピストルとサーベルと、ね……」

「それはね二郎さん、お隣のお家には煙突があるからサンタクロスのお爺<sup>じい</sup>さんが来るので  
す」



「でもいったよ、みつちゃんのかあさんがね、煙突がないところは天窓がいいんだって」

「まあ。それじゃお手紙を書いてみましょうね。坊や」

「嬉しいな。ぼくピストルにラツパもほしいや」

「そんなにたくさん、よくぼる子には、下さらないかも知れませんが」

「だってぼく、ラツパもほしいんだもの」

「でもね、サンタクロスのお爺様は、世界中の子供に贈物をなさるんだから、一人の子供が欲ばつたら貰えない子供ができると悪いでしょう」

「じゃあぼく一つでいいや、ラツパ。ねえかあさん」

「そうそう二郎さんは好い子ね」

「赤い房のついたラツパよ、かあさん」

「ええええ、赤い房のついたのをね」

「うれしいな」

クリスマス之夜があけて、眼をさますと、二郎さんの枕もとには、立派な黄色く光つて赤い房のついたラツパが、ちゃんと二郎さんを待っていました。二郎さんは大喜びでかあさんを呼びました。

「かあさん、ぼく吹いてみますよ。チツテ、チツテタ、トツテツ、チツチツ、トツテツチ」  
ところが、みっちゃんの方は、朝、目をさまして見ると、リボンと鉛筆とナイフとだけ  
しかありませんでした。

みっちゃんはストーブの煙突をのぞいて見ましたが、外には何も出てきませんでした。  
みっちゃんは泣き出しました。いくらたくさん贈物があっても、みっちゃんを喜ばせるこ  
とが出来ないのでした。みっちゃんはいくらでもほしい子でしたから。

(一九二五、九、二五)

# 青空文庫情報

底本：「童話集 春」小学館文庫、小学館

2004（平成16）年8月1日初版第1刷発行

底本の親本：「童話 春」研究社

1926（大正15）年12月

入力：noir

校正：noriko saito

2006年7月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# クリスマスの贈物

竹久夢二

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>